

對馬壺岐紀行

五月十一日(金) 晴

一五・〇七加賀温泉駅發にて旅立つ。玄界の蒼海に浮ぶ離島の友に再会することは、万物が各々同類が相集り、水が低きに流れ、火が燥いた物に燃えつくように、一同声は相応じ、同気は相求む」という心境であつた。阿鼻叫喚の泪羅の淵ともいえるビルマの戦場に於て、よく良佐していただいた大山氏から送られた対馬・壹岐の資料を、真編三絶のようにならぬ、読破し続けた。其の資料を通した相変らずの浩洋とした友情は、枕石漱流の生活を続け成果も倍化するであらうと思いつつ、六時間の車中も屈託することなく、二一・一五小倉駅に着いた。大山・平古場兩兄の頸を延ばして踵を挙げているような温い出迎えを受け、手をあげて喜びの挨拶を交わし、積る好意に対して深謝の言葉を述べた。本場に戦場膠漆の友は幾度生れ変わらうと、いつまでも兄弟の如くありたいと懇願する胸中である。小倉は五十七年三月、陸士同期の皆川節夫君の案内でメカリ公園のパゴダに参詣。死屍累々の凄惨を想起して、敬虔な心地で釈迦仏の前に額いたことを思い出す。時の経過は誠に白駒の隙を過ぐるが如しである。時の経過は誠に白駒の比田勝航路の乗船場まで徒歩約五分。乗客も少く船内は閑々として悠々とくつろげた。死の

憂いが忘れ去つた現在の境遇に生きるとはいえ、久振りの再会を祝してビールにて乾杯。快哉、二二・四〇出航。洪海は波立たず。静寂に包まれて我々の心を和げる船旅も風情があり、催眠術に掛けられたように深い睡眠についたのであつた。

五月十二日(土) 晴

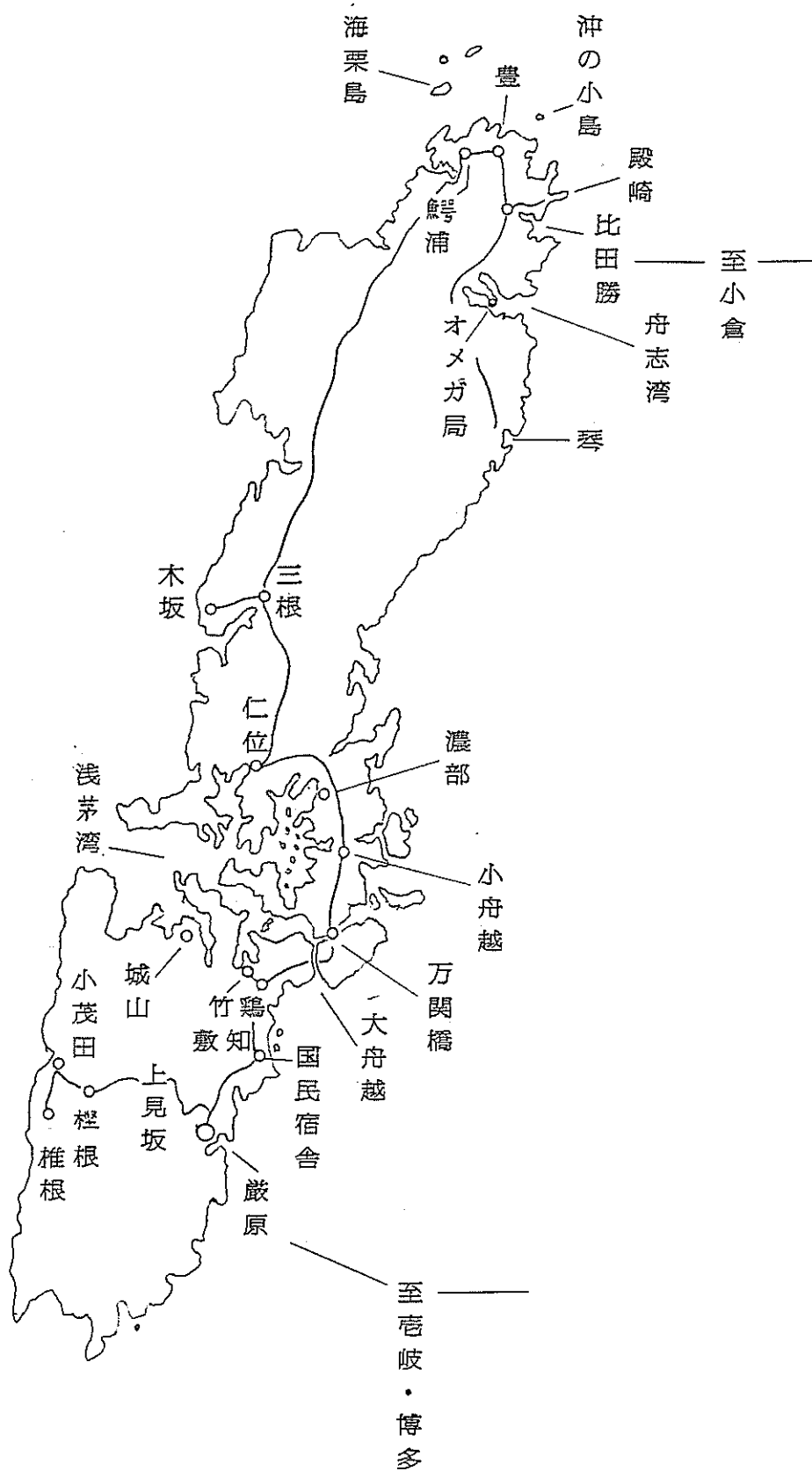
古い人、懐しい人、近きし人の里

雲海渺茫の彼方・比田勝港に〇四・五五着。〇七・〇〇までは船内仮泊が許されるため、一行はその予定をしていたところ、早朝に拘らず宮原正夫氏(第八中隊)が船内に姿をみせて、温く出迎えてくれたのである。遠くに在る友を偲ぶ春樹暮雲の熱情に我が胸は打たれ、また躍動し、感通すること甚しく、今尚、菊花の契りが堅く続いているようであつた。早速、用意していただいた車に乗つて、上対馬町豊の宅に案内され、暫らくの休憩に移つたが、万般に互る氣配りに対し、御礼の辞も無しである。奇しくも宮原正夫氏の左隣は武末綱作氏宅(第六中隊)であり、向側は故上野秀夫氏宅(第八中隊)であつた。三氏共に同じ大隊に所属し、彼等騎竹の友は此の世で尽せなかつた因縁

を、来世までも強く結んでいかれることである。
 原田勝利氏（第六中隊）からの音信によると、武末綱作氏は、第六中隊戦友会始つて以来、欠席されたことがなかつたが、本年四月八日の会には、負傷された足の痛みのために欠席されたとの事であつた。案じながら拝顔し挨拶を交わしたが、割合に元氣そうであつたのであつた。然しながら、宮原・武末両盟友を始め我々一行三人とも、白髪は両鬢を被い肌膚は復た実ならず、壮士惨として征途に在つた面影は薄い。四十年の歳月は如何ともし難しである。宮原氏宅で休憩の後、六時四十分、時を移さず幸未亡人の案内をいただき、「晃耀院殉忠義秀士」の戒名の位牌をまつる。故上野秀夫殿の御霊前に礼拝したのである。痛哭流涕して頭を垂れ、慰霊申上げたが、憂愁幽思、心痛んで声なく、音をたててくずれるようになつた。ナンの戦況や、三途の河を渡りそこねた私の心境に就いては、昭和十五年八月十五日の敗戦三十五周年記念日上梓した拙書「阿忘」（生と死を忘れるとの意）の「吾が戦闘記に詳しく記述したが、挫折感と心の傷痕は深く、其の全責任は私に在り、更めて断腸の思いで御詫び申上げたのであつた。また故人の妹様の御主人も第三大隊に所属し

、戦死されたと承り悔言も知らず、只管、両御英霊の安らかな御永眠を切に祈願したのである。
 人命至重 人命は至重なり 命にすぎる宝なし
 赴死 赴死に赴かして責を塞ぐ
 死に赴かして責を塞ぐ 死の責任に對して誠に
 涙 涙は恥を蒙り 涙は恥を蒙り 涙は恥を蒙り
 慟 裂肺肝 慟は肺肝を裂く 眞赤にする
 慟は肺肝を裂く 眞赤にする
 お三方の家族の方々の親身に優る歓迎は、歡喜と鳴咽、悲しみと喜びとが入り乱れ、感胸を衝くさまは筆舌に尽せず、感慨悲歌の姿であつたのである。宮原・上野両氏の御令息はご多用の身に拘らず、我々の為に車を提供し、武末・宮原両戦友と共に、いよいよ興味津々の対馬の旅に胸を躍らせて出発したのである。

対馬概要図 及び 経路



殿崎 (上対馬町西泊)

比田勝港の東北部に細長く延びる半島で、断崖の景勝の地である。明治三十八年五月二十七日、対馬沖で展開された日露の日本海大海戦は、我々年代の者は誰しも関心が深い。文献によると此の戦況を村人たちは、麦を刈りながら観戦したといわれている。さぞかし胸のすく思いであつたことだろう。殿崎沖で沈没した露艦ウラジミル・モノマフの乗組員一四三名がボートで上陸した所で、東郷元帥の題字による黒ずんだ原石の記念碑が、簞えて建てられている。但し風雨にさらされ字句の判読がでなかつた。点は残念であつた。半島の先端から振り返つて、海と山に囲まれた対馬を眺望すると、峰が起伏して山脈がそれらに從うように連なり、峰は互いに寄り添ひ、樹はそれらに從つて繁り、山自体が活きてる感じであつた。恰も大軍を統率するような森然とした姿は、自然美の構成原理を教えていたのである。山海襟帯の景観の優れたことが、対馬の自然から受けた感動の第一印象であつた。

オメガ局 (上対馬町舟志)

舟志湾の美観を酔興しながら眺め、車はオメガ局へと突つ走つた。

舟志湾を中央で分断して突出する半島の端に測量ポールのように赤と白に塗色した高さ四四五米の塔が、東洋一の高さを誇り天を衝かんばかりに聳えてゐる。海上保安庁の職員は親切丁寧に詳しく説明した。海綿が水を吸うように知識を求めて聞き入つた。オメガは地球上のどこでも利用することが可能で全世界に八局のオメガ局があり、その一局がこの対馬の舟志である。世界的に貴重なものだ。(八局だけで地球全体に均一精度の送信ができる) オメガ波を発信する此の局は電波の燈台で、雨や霧の天候に左右されることなく、何時でも、簡単に位置を求めることができる。その結果、船舶の航行の安全と運航能率の向上、漁場の確認等に役立ち、人工衛星と組合せて航空機・船舶の全世界的救難システムを作れるようである。衆望を慰められることを期待して已まない。細長い塔でも塔の中には三米のエレベーターがあり、塔を支える四周の支線の太さは12×15厘、碍子の重量は四匁というから、途轍もない大きいものである。

琴の 大銀杏 (上対馬町琴)

舟志部落を通過して琴へと向つた。国指定の天然記念物「イチヨウ」の巨木は全

国で二十余件あるが、岩手県長泉寺の幹回り十
四米について、二番目に大きいものだといわれ
ている。

「沖より見れば、茂りて山の如し」と文化六
年（一八〇九）に書かれた対馬記事に記載され
樹齡は一五〇〇年という。

上県郡一円で家を建てる時に、調子をそろえ
て繰り返し唱われる次のような地つき歌がある、

「琴のイチョウは対馬の親木

三十と五尋といわれているが、正確には十二・
五米であるという。

かつてビルマの草原に於て、敵機の発見を避
ける為に、「寄らば大樹の陰」とばかりに部隊
が遮蔽した菩提樹が偲ばれ、一見する値があつ
た。また牛を蔽いかくすほどの大木を「蔽牛の
木」といい、「これをめぐらすに百回あり」と
誇張した荘子の言葉を想い出したのであつた。

倉庫小屋

琴から比田勝港へと車が反転して進んだ。途
中の至る所で他国に類を見ない木造の高床式で
、古びた小屋が散見できた。
これらは倉庫の一種で、穀物や普段使用しな
い家財道具等の一切を入れ、保管している建物
で、母屋より相当に離れているのが特徴だ。
北陸地方にある農家の米倉に少々似ているが
、対馬のこれらは木材の豊富な性か、豪華なも

のばかりだ。万一、住居が焼失しても倉だけは
残り、本土では倉は資産家のものだが、対馬では
う。一般的に普及物なのである。
一、対馬北端の港町「鰐浦」では此の小屋がびつ
しりと建ち並び、誠に壮観な光景であつて往時
の繁栄を物語つていた。
み、重ねた石垣で囲む大きな家屋が目立つた。武
家屋敷か庄屋様の住いか、鎌倉時代や室町時代
に戻つたような錯覚をおぼえたのであつた。

「美景良辰」ヒトツバタゴ

（上対馬町鰐浦（豊））

豊から鰐浦にかけては、国の天然記念物に指
定されている山々は深白の花で覆われ、五月晴に映
える紺碧の空と海とに調和して、今は盛りと照
り榮えている。
其の美姿は誠に清純で樹上に雪を冠つた景に
似ており、何とかして此の見事に咲いた花弁を
散らさないでほしい、風もどうか吹き散らすな
と、思いを巡らした。できれば孫娘の髪に一枝
折つて挿みたい心地であつた。
対馬を訪れる時期の選定について、ヒトツバ
タゴの満開期が適当だとこの戦友各位の提言は、
誠に時宜を得たものと感謝し、此の満々白々の
観賞だけでも対馬足跡の価値は充分である。

ヒトツバタゴは、もくせい科の落葉樹で、日本では木曾川流域と対馬北部に自生している。大ナタオラシと呼べたり、五月の満開期には雪のような小さな花が、樹上に咲き満ちて入江を照らすことから「ウミテラシ」ともいわれ、地元の人達に親しまれているようだ。

ヒトツバタゴは「一葉タゴ」（タゴはもくせい科のトネリコの別名）の意味であり、見なれない木だから「ナンジャモンジャ」ともいわれるように、多くの名前をもっている。（自生地）にたてられた環境庁・長崎県の文を参考）

美景良辰（よい景色とよい時候）

回首花慢照浦
首を回せば花慢浦を照し

花慢とは花が満開で幕を引き廻したように見えること

樹下華正月之夢

樹下花胥之夢

「華胥之夢」とは中国古代の伝説の皇帝の一人である黄帝が昼寝をして、夢で華胥という国に行き、その太平な状況を見たという故事から、俗界を離れて太平の夢で

もみたいという意味を表す言葉
私も豊から鰐浦にかけての素晴らしい開花の景觀に見とれ、あのヒトツバタゴの木の下で、黄帝のような夢をみたいと憧れて、拙詩をつくる。

鰐浦（上対馬町）

神代から持統天皇（六九七）までの神話伝説を記述した日本書記に「神功皇后が和珥津より発ち給う。云々：新羅に至る。」と、三韓征伐の所伝の一節に書かれている。勿論、事実かどうかは不明だが、「和珥津」という地名が記載されていることは事実である。

邪馬台国の女帝であつた卑弥呼（一八九）の時代から倭人（昔、中国人が日本人を呼んだ呼び方）がしばしば海を渡り、新羅を犯した事は中国の三国志や朝鮮の新羅紀にも書かれていることだ。その事から朝鮮に渡る最後の寄港地がワニツと称した鰐浦なのである。

ワニの語源は、我国では因幡の白うさぎの伝説にあるように、ワニザメと呼んだ例もあり、舟のこたをワニと呼んだともいわれ、また、大和朝廷時代の水路の管理者をワニ氏という説もあるようだ。何れにしても古来から重要な船泊であつた訳である。

秀吉の文禄・慶長の出兵時には、肥前名護屋の本陣と朝鮮の釜山を結ぶ寄港地として、諸軍の船が此の地に往来し、兵站基地として重要な

役割を果し、史跡として魅せられることが多く興味深い所である。

文禄の役

秀吉は天下統一後、明国の征伐を計画、朝鮮に道案内を命じたが応じなかつたから、一五九二年の文禄元年、宇喜多秀家を総大将に、大軍を朝鮮に送つた。朝鮮国王を遼東に走らせ、明の援軍を碧蹄館で破り、九三年に停戦。

慶長の役

秀吉は明使のもつて来た書面に「なんじを封じて日本国王となす」とある言葉に怒り、九七年小早川秀秋を総大将に再度出兵した。戦況は不利のうちに翌年八月、秀吉は死亡して、遺命によつて撤兵。

ともすな石 (鰐浦)

鰐浦にある本宮神社に「ともすな石」がある。上対馬町観光協会の説明には次のように記載されていた。鰐浦は古く中国大陸及び朝鮮往来に於ける国土最後の村である。古事記等の古書に表わされてゐる「神功皇后、韓を鎮めんと和珥津を征で給う。仲哀九年十月一日(二〇〇)」とあるはこの地の発祥である。神功皇后の率いる大和軍船は北対馬一円に待機していたが、皇功本陣はこの鰐浦であつた。

この氏神「本宮神社」はその本営跡である。皇后御入浦の時、旗艦より投げられし網を村人が受けて結つた石が、この石である。

「伝説」

伝説は事物・場所をはつきりと示している。そして、そこに人物が加わる。つまり話の中心になつてゐるのは、物と場所と人ということになる。時として人は、変ることがあるが、ある人物が、ある場所にある事物を残した事を伝えるものが、伝説である。

伝説はまた、風土に対する深い愛着がある。それは事実をこえたものであり、更に信仰性と象徴性と道徳性とユ一モア性をもつてゐる。そして、それは現実の中に根ざしてゐる。だから、伝説には生活に即した伝説が多く、生活の縮図的なものも、もつてゐる。

一、民話とは次のような差がある。民話とは必ず目につくもの、たとえば「ともすな石」のように、岩石とか樹木とかに結びついてゐる。

二、民話には「昔ある所に」というように、必ずしも場所を明示してゐない。民話は最初から想像上の産物として受け入れられてゐる。

航空自衛隊基地の見学（上対馬町海栗島）

俯瞰すると、澎湖とて蒼海に小さく浮ぶ海栗島が見える。この夢幻の境に誘い込むような佳麗な島は、一幅の絵にしたい景観であつた。人の島を殺す刀を人を生かす剣に変えた千軍万馬の勇士も今では老境に入り、人間縁業をやめて彼の島の上に住みつきたい胸宇だ。島の上の白亜の建物と円形のドームは、瞭然と航空自衛隊のレーダー基地であることがわかる。幸いなことに宮原氏のご令息が同基地に隊員として勤務され、司令の許可を得て島に渡り、種々で見学させていたのだ。多謝。詳細なことは軍機上割愛しなればならないが、我が国の防衛と平和の維持に、不断の努力を続ける司令以下のご苦勞に對して、衷心より感謝の辞を述べ、旧軍の歴史を継ぐ彼等の益々のご健闘を懇願する次第である。

要塞重砲・豊砲台跡（上対馬町豊）

旧陸軍要塞重砲の堅塁として威容を誇り、遊弋する敵の鐵鎗を睥睨し、潮渦巻く対馬沖を固めていた壘が、果てしない大海を朝な夕な凝視し続けた昔の夢を偲びながら一巡した。一豊砲台は戦略上重要な海峡であることから

旧陸軍によつて昭和四年五月に起工し、同九年三月に完成したものである。三砲、戦艦長門の主砲と同じ。三砲塔部のコンクリートの厚さ三〇米。砲を操縦する動力は水圧を利用し、そこに先進的な技術がうかがえる（説明図より）。撤去されてゐる砲台として現在には砲身その他は等は往時の面影を残していた。

食前方丈・飡饕満堂（宮原宅）

食前方丈：席の前の食卓は一丈四方
飡饕満堂：もあつて、一杯の料理が
飡饕満堂：豪華な食事
飡饕満堂：夕食のこと
飡饕満堂：馳走
飡饕満堂：室一杯

豊砲台から岬に廻り沖の小島（椎根島）を遠望した。この島は不入の聖地であり、島大國魂社の神所とされている。豊町地区も弥生時代から古墳時代の遺跡が多く、神功皇后が矛と剣をこの地に取め、吾が國の名もここから生れたのである。豊の

宅に上対馬町の名所旧跡を廻り十五時ころ宮原氏
 の島の人達は「皆は私のために存在し、私は皆
 のために存在する」という運命協同体のような
 の、ほえましい感じを受けたが、向三軒兩隣り
 の戦友家族の方々は宮原氏宅に集つていた。
 一、朋、遠方より来る、亦、楽しからずや」と
 ばかりに、我々を饗応する準備に大宣である。
 界の有限な肉体と精神を持つ人間は、限られた世
 我々の中は動乱の時期に青年期を迎え、互いに戦友
 の一員として戦場を馳駆し、草行露宿した一死
 一生の交情であつても、このような迷惑をかけ
 ることは誠に恐縮な事である。
 航空自衛隊の司令・副司令を交え、戦友及び
 家族の人達と共に席についた。
 食前方丈の甘脆なご馳走は、所せましと盛り
 飾られていて、その山海の珍味に視線を注いだ
 だけでも飽腹し、その中、杯を傾けて酒を
 酌み交わし、血腥い殺戮の當時を忘れて金石
 の交りを喜んで祝つたのであつた。
 の酒池肉林の旨甘を養食しつづけ、時の過ぎる
 のも忘れるほどの酒宴は、深く心に銘して骨に
 刻み、是に辞を低くして礼意を申し上げる次第
 である。
 誠。に拙い詩だが、赤面をおして記すことにし
 た。

一夜之歡宴、值千金

連枝会致終身之感

連枝……兄弟のこと

一夜の歡宴、千金に値す

連枝の会、終身の感と致す

諸兄等の有難い一夜の御歓待は、我々と
 しては千金の値であつた。
 兄弟のような会であつた此の夜のことは
 、我々は終生の感激と感謝で一杯であり
 生涯忘れることはない。

五月十三日（日）雨のち曇

離別（豊町）

渡海逢迎 海を渡り逢迎し

戦朋談藪 戦朋は談藪す

相思相見 相思い相見ゆ

知何時日 知る何時の日ぞ

海を渡つて友がやつてきて、相い逢い、相いむかえた
戦友は話が多くて語り尽せない
(薮：語り尽せないことをいう)
お互いに相思うに、今度また相あえるのはいつの日であろうか

、花の咲いているころは、とにかく風雨が多く、世はまならないものだ。洪きい御世話になつた御三方との離別を悲しむように、今朝は雨降りであつた。
計り知れない数々の慈愛のこもつた甘沢を賜り、離愁の情はおさえ切れるものではない。兵馬の友は二身同魂であつた。

木坂神社 (降町木坂)

降雨の中を宮原氏のご令息は、今日も亦我々のために車を堤供していただき、木坂神社に慎独して参拝することができた。
伊豆山という神山の二八〇段を超える石段を登ると社殿があり、実に神々しい社である。
往時は八幡宮と称したといわれ、明治四年に海神社と改称した対馬一の宮である。(海神と八幡神を合祭)
由緒には、神功皇后が新羅征伐の帰途、幡八流を祭り、我国八幡宮の創地だといわれている。(厳原の八幡宮を八幡新宮という)

八幡宮は八幡神、即ち応神天皇・比売神・神功皇后をまつり、源氏が氏神にして以来、武家の守護神として全国各地にまつられたのである。
(社殿は八幡造りである)
この神社には重要文化財の新羅仏をはじめ、多くの宝物が展示されていることだが、拝観することができなかった。

和多津美神社 (豊玉町仁位)

仁位浜の外浦を「わだずみ」といわれ、青い海、緑の山に囲まれた森厳な趣の浦辺の渚に、式内社「和多津美神社」が鎮りまつられていた。
雨上りの山のひだひだから盛んに水蒸気が立ちのぼつていた。殿宇は南面のうな山を背にしており、その濃緑の上に薄墨をちらした風景と、静かな海に浮ぶ石の鳥居とは、落ち着いた調和である。やはり写真では味えないもので実に良い。このような村の中の古くから歴史を包みこんだ社には厳肅そのもので、慎思をこめて参拝したのである。
対馬の方言では入江のことを「わだ」といい、日本の古語でも海のことを「わだ」と称していた。「つみ」は「神」のことである。
祭神は海幸・山幸で知られている彦火火出見尊(ヒコホホデミノミコト)・豊玉媛(トヨタマヒメノミコト)で、海上の安全を祈願する神

である。

本殿正面の海中に立つ鳥居は満潮時には二米ほど水面に沈み、海水は高床の社務所まで流れこむといわれ、遠い神話時代を偲ばせる古式ゆかしいひなびた神社である。杜前の国道沿いに、四周が壁の替りに石を積んだ瓦葺の二つの小屋があるのも、興をそえて印象に残った。杜の裏山に咲く満開のヒトツバタゴの花と、浅茅湾の紺碧の海は、対馬の素朴さを如実に物語っていた。本当に対馬は神話伝説の里である。式内社とは、醍醐天皇の延喜七年（九〇七）に撰進された「延喜式」神名帳に記載された神をいう。

真珠養殖に励む「犬束」氏（美津島町濃部）

仁位浦の入江を離れて山を越えると、そこに濃部浦の湾が美しく拡つてゐる。車は国道を右折して浦沿いの海岸を走り、新築の家屋の前に停つた。犬束氏（第八中隊）宅である。奥様は長年触れ合つていたように愛嬌よく笑顔で出迎え、主人は真珠の養殖現場だと告げた。遁世して悟道に入つたのであれば別だが、遊惰無志の生活をする私は誠に面目のないことだ。再び乗車して同氏の経営する養殖場へ赴くと、突然血の営みが噴き出したような、青眼を開いた歓迎を受けたのであつた。反射的に我々も

亦、感覚中樞までも銘感したのである。矢張り戦友は第二の我であつた。く、初めて拝見する真珠の養殖は総てが物珍らしく、一応の説明を承つて写真に収めた。そして浅茅湾に臨むこの地は、世上のわずらしい心労を忘れて、俗塵に染つた心を洗い清めたるには最適の地である。うと強つた印象づけられたのであつた。一行は同氏の家に戻つて、尽食を美味しくいただいた。卓上の盛撰は形容の辞も知らないほどの豪華版である。ほんのわすかで満腹になつてしまふ所謂「一飽に過ぎず」という通りだ。そして家族の方の応接に暇のない御歓待は、お礼の言葉が塞がる程であつた。瞬息のうちに時は過ぎ、爾後は犬束氏の案内を煩わして一路南へと進んだのであつた。二日間、互に砕けるような御世話を頂いた。宮原氏のご令息氏とも愈々別れなければならぬ。い時が来た。陰ながら春秋に富む彼の永昌を祈つて已まない次第である。

小船越—万関橋—大船越（美津島町）

東浅海と内浅海との間にある地狭部を、船を曳いて越えたという小船越を通過し（遺唐使・遺新羅使も此の地を越えたという）、万関橋で

タクシーは止る。降雨が甚だしく、附近一帯を
 徜徉として散策できなかつた事は残念だつたが
 、下車して写真を撮る。明治二十九年（一八九六）日本海軍は、浅茅湾
 の奥にある竹敷に要港部を設けたものの、日本
 海に通じる大船越は浅く、艦艇が出入できない
 たため、日露戦争の間、新しい明治三年（一九〇〇）
 この地を掘り切り、新しい水路を開き、日
 本海戦には水雷艇が此処から出撃したのであ
 る。この戦路上重要な所には今、全長八一米、
 高さ二八米の橋がかけられ、南北の対馬を結ぶ
 唯一の橋である。橋の北側にある石碑に次の歌詩が刻まれてい
 た。潮干なば、またも吾来む、いざ行かん
 晴れておると朱い橋上から眺める景観は、さ
 そかし素晴らしいものだろうと思ひながら、万
 関橋を過ぎると、直ぐ大船越の瀬戸に着いた。
 越の瀬戸が切り掘られ、初めて対馬が南北の二
 つの島となつた訳で、これによつて東西の水路
 が連絡し、島内の通運は多大な利便を受けたの
 である。大船越の橋を通り抜けてから対馬空港を見学
 し、阿比留氏の宅に向つた。対馬空港を見学
 し、北対馬の見学も一応終つたが、これまで踏破
 酔した総てが幻想的では、白屋夢のようない一種の陶

故阿比留七郎氏の霊前へ（美津島町鶏知）
 「士為知己者用」士ハ己ヲ知ル者ノ為ニ用ウ
 これは中国の司馬遷の詩の一節だが、この意味
 の通り犬束氏は我々の心の中をくみとり、故阿
 比留七郎氏（第八中隊）宅に案内してくれた。
 兵馬の友は金銀に勝るもので、其のつとめとし
 て有難く感謝を申上げた。
 人の一生には避ける事のできない生・老・病
 ・死・の苦の五大苦があり、また死生命ありとは我
 云え、去る五四年に彼が逝去されたことは我
 が胸をつまらせ、鼓琴の悲に涕泣するばかりで
 あつた。ようよう、遠隔の地を訪れたが己に兄は
 空無となつて、人壽はまぼろしの如しと嘆かな
 い訳にはいかない。
 雪子未亡人の守る故人の霊に合掌して、安ら
 かな御永眠を祈る中に愚痴をこぼし、根なし草
 の人生のはかなさを悲しんだのである。そして
 我々が死について考えることは即ち、限られた
 人生を如何に生きるかであると思つた。
 人生をあわただしき旅の為に長居することなく、生
 ず、あわただしき旅の為に長居することなく、退
 は、失礼ながら静かに弔い言葉をかみしめて、退
 去したのである。帰りの言葉をかみしめて、退
 何と一寸の延びれば、雪子殿の御健勝を祈りたい。
 という意味で、雪子殿の御健勝を祈りたい。

八幡宮 (厳原町)

愈々厳原に向う。十萬石の城下町の面影が左に残る。百万石の城下町金沢は其の比ではない。中世から近世にかけて、権力を保持した武家や豪族の門を構えた家敷跡の風情は、榮えた往時を誇示している。秀吉の朝鮮出兵の天正十九年(一五九一)に、肥前の名護屋の本營と釜山を結ぶ中継基地として築城した清水山城麓に、厳原の氏神様である八幡宮がある。天武天皇の時、木坂の八幡宮の神靈を勧請して清水山に祭つたもので、府中八幡宮(八幡新宮)と称したのである。京都の清水八幡宮の原廟であり、宇佐八幡宮の本社となつた由緒のある社である。かつて清水水や宇佐に詣でたが、ここ厳原の八幡宮の古色蒼然とした殿宇は、燈籠のたち並ぶ古い石段と共に、実に森厳であつた。恭しく拝礼して去つたのである。

竹敷海軍基地と金田城 (美津島町)

大東氏と対馬出身の大山氏との周到綿密な計画に基く旅は順調に進んでいた。明治以来海軍の要港となつていた竹敷へ、車はスピードを上げた。現在も海軍基地の一つだが、時代は移り変つて様相も異なり、緑地の姿さえ見え、ただ小さな兵舎があるのみだ。誠に今昔の感がした。遙か西方に標高二七六米の有名な城山が、雨を通り越して遠望することができた。所謂「金田城」で、天智天皇六年(六六七)に築城した日本最初の城跡である。筑紫の大野城と共に朝鮮の古い山城と同じ型式で、興味深いが徒歩の登攀の時間もなく、文献の写真眺めて想像をたくましくしたのであつた。岩壁が高く屹立した断崖絶壁のうえに、山を取り巻くように石垣が巡らされ、三つの谷を抱えこんだ城跡は、附近の縄文遺跡や倭寇の巢窟の跡と共に、機会があつたら是非訪れたい。

国民宿舎「対馬」 (美津島町鶏知)

万葉の宝庫と云われる対馬の古代文化と自然美を堪能して、第二日目の観光を終り、国民宿舎に骨を休めることになつた。対馬海峡の水平線に広がる夜の漁火を、旅人に魅了させるような海岸に建つ宿舎は、実に風光明媚な所である。

宿泊するに當つては、大束氏のご親切な接待にあずかり、謝辞を達すること、金に玉より優つた志に、深く感謝申上げたい。珠玉の風呂浴びて旅の疲れをいやし、早速酒宴の席にいたが、恰も三国史の「桃園之義」を再現したようであつた。

同聲は相応じ、同意は相求むという肝胆相照（繞）交りは、「絶交」の古語のようだ。

（繞）交りは、「絶交」の古語のようだ。

味から、深い旧知の情を喜ぶ時に用いる語）

昨夜といひ、今夜といひ、山重なり水復する、馬の幽境の地で、このような感激の盛會を再び催すこともないだろう。

阿比留雪子様が訪れて、席は益々盛りあがり、飲慕の情は心に波が立つほどであつた。阿比留様のご厚志に感謝の意を表したい。

食草繼露命 草を食い露命を継ぐ

流血漂杵友 流血は杵を漂す友

鼓腹俱酒宴 鼓腹して酒宴を俱にす

今夕復何夕 今夕は復何の夕ぞ

草を食つて露のような命をつなぎ、戦いが激しいため、流れる血がキネの痛ましい友よ、満腹になつた腹をポンポンたいて、今夕は亦何という愉快な夕であらうか。

五月十四日（月）曇のち晴

対馬の銀山（厳原町樫根・椎根・床谷）

国民宿舎の前で記念写真を撮影し、お世話になつた大束氏と別れる時が来た。逢うは別れの始めとは、うまく表現した言葉だと感じたのであつた。

タクシは一路、小茂田の海へと走ると、左手に東邦亜鉛対州鉱業所の廃屋が見えてきた。この地が日本最初の銀の産出地の一部である。

「日本書記の天武天皇三年（六七四）三月条に、対馬国司守、忍海造大國言す。銀、始めて當國に出づ。即ち貢上る。故に諸々の神に奉る」と記載されている。

また日本三代実録の貞観七年（八六五）に、大宰府よりの言上として、「対馬島の銀穴下県郡に在り」と記録してある。

再開を企てたが失敗。慶安三年（一六五〇）に

檜根と推根の間の奥山を開発し、延宝年間（一六七三〜八一）を最盛期したが、元文二年（一七三七）に閉山したのである。鉛等を採掘したが大正・昭和にかけて、銀・亜鉛。今も銀山神社の古びた社があり、盛期には床谷千軒と呼ばれたほど繁昌したという。永の役の為に異国の賊船に二度三度と侵され、文永の役の目標となつた事も考えられて興味深い。

石屋根と対州馬（巖原町推根）

一昨日見案内のどれにも掲載してある石屋根は、くした高床式の建物で、屋根瓦の替りに自然の板石で葺いてあるのが特徴である。歴史の重みとなつて、今に伝えられていた。風の強い対馬の西海岸の人達の生活の知恵から、火と風に強い石屋根が浮び上つたのである。う。また板石が附近で産出したと思うが、絶対に見逃せない観光の一つであつた。石屋根を見学中、幸いなことに一頭の対州馬が、老婆に見学に来てた。実にのどかな風景であつて、民俗の宝庫の里のようである。対州馬は、廻り大きい感じである。老婆に尋ねてみると混血だそうで、対馬の原産馬は矢張り

朝鮮馬と同じだろうと思つた。懐しい。

元寇の古戦場小茂田浜・小茂田浜神社

断崖続きの対馬の海岸の中で、小茂田浜の辺りだけは、砂浜ではないが石浜が延びている。古くは刀伊賊が侵入し、くだつて文永の役の上陸地に選定されたことは、うなずける。

「刀伊」

朝鮮語で夷狄（イテキ）という意味で、一〇一九年、対馬・壱岐・肥前等に侵攻して

この浜のほとりに、宗助国をまつる小茂田浜神社が鎮座し、悲劇の跡にたつ元寇奮戦之図には、左のように記されていた。元軍三万余艘、相争ミ来テ対馬守護代宗助国僅に二十騎ヲ從ヒ防戦ス。此時島民ノ義勇戦死スル者数フヘカラス。残ル処ノ老幼婦女ヲ捕ヘ掌ヲ穿、縄ヲ透シ連貫シテ船ニ繋キ殺ス。其惨状見ルニ忍ビス。敵ノ先鋒ハ重罪人ヲ用フ。之ヲ名ケテ生券軍ト称スルモ余リアリ。宗助国ハ一騎当千ノ勳キアル勇士ヲ指揮シテ戦ヘ共、衆寡敵シ難ク終ニ戦死スルニ至ルモ、勇気掩マス賊ヲ睨シ斃ル。助国ノ弟之允モ同シ。肥後ノ流入江井藤藏ト源藏此ニ忠死ス。援軍不来嗚呼。」

「特旨ヲ以テ宗助国ヘ從二位ヲ贈ラセ給フ」
「明治二九年十月二日聖恩枯骨ヲ酒ス」
「全国感泣ス」

上陸した敵兵力は不明であつても、九〇〇隻に分乗して来襲した三万余の大軍に、わずか八十余騎で奮戦した宗助国以下の義烈に對し、股慄の激闘を体験した一人として、当時の血なまぐさい戦闘を偲び、心痛んで声なしと云う心境であつた。

元より見た元寇の役の推察（参考として）

大陸では一二三四年に金（女真族・満州民族）が滅亡するまで、金と南宋が激しい戦争を繰返し、その間に第三勢力だつた国が台頭してきた。これが蒙古族を統一したチンギス汗の蒙古である。

第五代目のフビライは軍を南下させ、南宋攻略の要めといわれた襄陽（湖北省）を囲み、五年がかりで漸く陥落させた。（一二七一年と呼称した）南宋攻略のネコの手も借りた時期にフビライ（在位一二六〇〜九四）は、あえて二万の大軍をさいてまで、日本を攻撃したのである。

倭寇で日本水軍の威力を知つていない。は、日本の水軍を利用して南宋（首都は南京―杭）を挟撃したかつたという、軍事的判断をする大きな理由も成立するようだ。

元の兵は遊牧民族のため陸上戦には自信があつたが、水上戦は特意としない。その為長江流域の南宋政權を海側から襲撃する強力な水軍を欲したのではないか。フビライは汗（王）に

即位した翌年に、早や日本に使者を送つていた。即ち南宋平定の戦略を持つていたからだろうと判断できる。

鎌倉幕府は数度にわたる日本への使者が、時の鎌倉幕府は悉く黙殺した。フビライとしては、いささか日本を懲らしめる必要を感じたのかも知れない。遂に兵をおこしたが、十月二十日の暴風によつて元軍は自滅した。これが「文永の役」である。（一二七四）

其の後日本へ二度使者を送つたが使者は二度とも殺された。しかしフビライは直ぐには出撃できなかった。丁度南宋と最後の決戦に突入していたからである。

一二七九年南宋を滅ぼしたフビライは、二年後の一二八一年、十四万の大軍を以て日本を攻撃した。今回の攻撃はその数から推定して、しやにむに日本を攻撃し、元の力を誇示して、本氣になり、日本を征服しようとしたものと思われる。

鎌倉幕府は北九州に防塁を築き、元軍との激しい戦いが行はれたが、今回も八月一日の台風によつて元軍は壊滅した。これが弘安の役である。

この二度にわたる戦いで鎌倉幕府はその寿命を縮めることになつたが、鎌倉幕府が元に對して強硬な態度で臨んだのは、日本への国書の末尾の一句に起因したのであつた。

宗助国のお胴塚と法清寺（厳原町桤根）

火砲のない弓矢。刀剣時代の戦斗状況を想像しながら、車は法清寺に着く。法清寺は「大山豊」氏の生誕の寺であり、宗助国のお胴をまつる寺の出身だと思ふと、彼の生立ちが一段と厳しく感じたのである。全島からみると、猪の額ほどの小茂田浜の戦斗は、一方的な戦斗だつたと思われ、宗助国公の首と胴が離ればなれの地に祭られ、その塚があることからは、肝腦地にまみるような悲惨さを窺ひ知ることが出来る。法清寺の観音堂には、本尊の千手観音のほか、蒙古仏・高麗仏十五体が安置されている。大山氏の陰で此の仏像に参拝できたのと同時に、写真の撮影までも許された。更にご住職は対馬の古の仏像で、門外不出の百済仏（高さが十寸の銅造り）を手にして現れ、厳かに拜む事のできたのは幸運であつた。法清寺（曹洞宗）の蒙古仏・高麗仏は、明治初年まで二十二体あつたといわれ、現在は永平寺本山・宮内庁・厳原資料館に一体ずつ保存されていゝという。文献によるとこれらの所謂朝鮮仏は対馬に数多く保存され、現在確認されているものだけでも約百体あり、未確認のものを含めると、其の数はまだ増えるという。これはただけでなく、朝鮮仏があるのは、日本ではこの地方しかなく、朝鮮仏もあるのは、日本

から統一新羅、高麗、李朝の各時代に亘つていて、朝鮮の仏像の変遷をたどることも可能である。これらの朝鮮仏或は蒙古仏が対馬に多いのは、対馬が日本と朝鮮半島との接点にあるといふ地理的条件に無縁ではない。どのようにしてこれらの仏像が渡つて来たかとなる、倭寇と呼ばれた日本の海賊が掠奪して来たものであるか、中国から対馬の浜に流れ着いたためだろうか、諸説があるものの明らかではない。只この仏像が対馬の津津浦々の寺の小さなお堂や神社に、日本の仏像と並んでまつられ、ごく自然の信仰や生活の中に受け入れられて来た事は事実である。木坂神社（海神社）にある如来像は、新羅仏の傑作の誉れが高いが、これもその証拠の一つである。法清寺を去つてから坂道を登ると山あい谷間には、日本最古の銀坑と伝えられている銀の本古坑跡があり、これを見学して歴史の里根部落と別れたのであつた。

上見坂展望台（厳原町）

標高二五八米の此の地の展望は対馬随一といわれ、山の向うには日本の代表的溺れ谷、即ち美しい山々が水におぼれて沈んでいる。ような浅茅湾が見えている。大小無数の島が

点在し複雑な海岸線は箱庭のようで、さながら尺山寸水と形容しても過言ではない。神秘的な壮観は竜宮城に似た絶無なものだと賞賛したいものであった。

よく晴れた日には遠く朝鮮や九州本土の連山も眺望が可能と聞かされ、往時、伝馬船で朝鮮に日帰りで行来した噂も本当だろう。そして一度この湾に入ると、出口も忘れるという程だから、倭寇の巢窟だつた事も否定できない。

対馬の山道を走りながら、海や山が互いに競い合う景色を眺めるのに応接の暇もなく、いよいよ山を下ることになった。浅茅湾もこれで見取めかと思うと心から愛着を感じ、機会があつたら羽化仙ではないが、空から瞰下したいものである。

文献によると、ここは寛元四年（一二四六）大宰少貳府藤資能が、命に従わなかつた対馬の在庁官人、阿比留国時を、大宰大監惟宗重尚にうたせ、勝利を得たところで在庁落しの古戦場ともいう。（重尚は少貳から対馬の地頭代に任ぜられ、対馬を支配する事になった。宗氏の祖である）

厳原郷土資料館

神々の鎮まる聖地を伊豆山と称し（八坂の海神神社も伊豆山に在る）神社の前の原を伊豆原、海神社という。「イツ」は厳・稜威に通じ、厳原町の名前は、府中八幡宮の社前を伊豆原といつた事

からである。

昔は国府といい、藩政時代に府中と呼ばれ、鎌倉時代から政治・文化・経済の中心地として栄え、明治後「厳原」と改められたのである。

対馬を北から南へと廻り、宗家十萬石の城下町が、我々一行の最後の紀行地となつたのであつた。

昨日に引続き車で通る町並に門構の家敷や、石垣に古い歴史の名残をとどめている。その歴史に魅せられて、何より先に対馬郷土資料館を訪れた。（金石城の一角にある）

まぼろしの鳥「キタタキ」の剝製を始め、各種天然記念物、石器、土器、青銅器などの考古学資料、高麗版大蔵經、信使絵巻などの歴史資料が展示されていた。

一七世紀の日鮮交渉史上、貴重な資料である「朝鮮信使行列絵巻」が特に目にとまり、絵巻をうつした茶碗と手拭を買求めた。

「李朝通信使」とは、徳川時代に朝鮮から將軍の代替りなどの慶事に際し、慶賀の使節が来朝し、対馬藩がその先導と護衛をして江戸まで往復した。一六〇七年より一八一一年間に十二回に及び、一回は五百人前後に達し、其の往復も五ヶ月から八ヶ月の月日を費したと云う。

その異国情緒あふれる行列絵巻は、他ではお目にかかれなないものだ。但し文化八年（一八一）朝鮮通信使は江戸まで行かず、対馬で其の式が行われることになつたのである。

また大山氏出生の寺「法清寺」に安置されていた高麗仏の一体も展示され、館長は親切丁寧に説明してくれたのである。

資料館見学の後、大山氏の弟様が住職をつとめる宝泉寺に参り、茶菓の接待にあずかり暫く休憩した。この寺の創立は嘉吉年間（一四四二ころ）といわれ、境内には観音堂もあり、高麗仏もある曹洞宗の寺である。

万松院（巖原町）

戦国の末期から徳川の初期、豪壮な築城が流布した時代にも、対馬では天主閣や城櫓をもつた城を築いていない。寛文九年（一六六九）宗義貞（二一代）が櫓を築いて、府城または金石城と称したが、外敵に備えたためではなく、朝鮮信使の行列を盛大ににする為であつたようである。其の金石城跡の奥の方に宗氏の菩提寺万松院がある。再三にわたつた火災にもまぬがれた山門は、元和元年（一六一五）に建造された桃山式のもので、創建当時の古めかしさを残している。対馬では最古の建物だという。本堂内の右の片隅には、朝鮮国王から寄贈された青銅の三具足（ミツグソク・祭礼用）が、寺宝として飾られていた。これ一つ見ても対馬の文化が日本の最前線として、感銘を新にした。

山門横から自然石の石段を登ると、鬱然とした大木の茂みの中に、歴代藩主と一族の立派な墓石がたち並び、誠に壮麗の一語に尽きる。本三大墓地の一つと云われており、藩政六百年の威大な歴史を物語つて立寄るようであつた。日帰路、巖原町役場に立ち寄り、助役氏等と懇談する機会を持てたことは幸いで、「巖原町の文化財」という小冊子を頂いた事は有難いことであつた。

対馬と離別

堅甲利兵の驍勇高き歩一四六聯隊の諸兄から、市道の交りを越えた沛乎の御芳慮を賜つたことは、感荷して生涯忘れることはない。勿論人琴の嘆きも亦吾が胸を衝いたのである。戦汗の中で感受性の強烈であつた青年期に、生涯をかけて培われた仲は万事に優り、互いに生涯をかけても消すことはできず、今紀行の胸襟を開いたあつた。あの景は、云う能わずというところであつた。どのような豪邸であつても、神を建物の中に入れる事はできない。然し神の交りに似た戦友の情愛は、人の心の中に入り、住み着いていることを、強く説諭されたのである。三國志の魏志倭人伝に次の如き一節がある。

「居る所絶島、方四百里ばかり、土地は山嶮しく、深林多く、道路は禽鹿の徑の如し」と。この記載は対馬のことで、魏の国の使者が邪馬台国へ行く途中、対馬を経由した事実を証明している。このような対馬の豊富な歴史や伝説を、もう一度、ひもとく意欲を燃やしつつ、厳原港から乗船したのであつた。(一五・四五発)

「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」と云われ、その境に、凡人の我々も対馬の山水を満喫し、その影を眺めていたのである。離れ行く島影を眺めていたのである。

郷　　の　　浦 　　　　　岐

約二時間の快適な船旅を楽しみ、宍岐八浦の一つ郷の浦に着いた。(一七・五五着)長い歳の月を経た古色満々の城下町厳原と趣が異なり、郷の浦は新らしい白一色の感じを受けたのである。港灣を瞰下した弁天崎の静境に建つ弁天荘は、明日の宍岐観光に備えて安息を満たすために、最高の館であつた。

夕食までに稍時間の余裕があり、ホテルの車は我々を町の中心街に案内してくれて、孫達のお土産を物色したのも、旅情を深くしたものである。今回の旅の出発に先だつて原田勝利氏から案

内をいたただき、早速大山氏は第六中隊の馬渡弥五郎・下条岩雄両氏に電話して連絡がとれた。は運命というものは神の領域であり、時の歩みは矢のように飛び去つて行くのである。然しながら過ぎ去る永久に我々のものである。敗戦の痛恨を味い、恐れを知らずに死を賭して戦つた戦友は即ち、自己以外の自己である。

彼等両氏は異境の朋友の来島を知り、喜びを倍化して明日の芦辺港での再会を約してくれたのである。逆境は心友をつくり、その友と情火を交える。我々の歓喜も亦、倒れんばかりであつた。

睦しく楽しい宴飲を終えてから、室に備えつけてあつた宍岐の資料の書を読みふけり、旅の疲れは最善の枕だといわんばかりに、深い熟睡の眠りに着いた。

宍岐は対馬と共に大陸を結ぶ要路として栄え、三世紀に書かれた「魏志倭人伝」に「一支島」と記載されている。古墳時代の遺跡が多く、島内には弥生時代・古墳時代の遺跡が多く、遺跡の島としても著名だが、現在もまだ全貌は解明されず、先史時代のナゾを今に秘めているという。

古代の宍岐は、辺境の要害として防人(六六四)が守備に当り、新羅海賊の来襲(八九〇)刀伊賊の襲撃(一一〇一九)文永の役(一二七四)弘安の役(一二八一)には全土が蹂躪されたのである。その後、肥前の松浦地方を中心とし

て割拠した武士団・松浦党の波多氏が支配し、
続いて日高氏が、そして元龜二年（一五七一）
に平戸・松浦氏が君臨して平戸藩領となり、明
治までの三百年間、その統治下にあつた。事
地形的には平坦で、稲作を輸出している事
森林の多い対馬と異つて、稲作を輸出している事
ため、農家が一軒一軒が農地を平等に配分した
も、農家の地割制度は耕作の義務を負わせ、均等
（農地の目的のためである）

天然の良港「郷の浦」は、行政・文化・
教育の中心地である。一三世紀に、唐津城主波多氏が、
唐津城主波多氏が、唐津城を築き、（一二九三）
以来、城下町として栄え、旧藩時代には平戸藩の
代官が居を構えた地である。

五月十五日（火） 晴

志岐郷土館（郷の浦町）

四方の志をいいてタクシーに乗車し、龜山
城跡に建っている郷土館に、八時半の開館に呼
応して訪れた。
至つて狭い建物で、直ぐに蒙古襲来のパノ
ラマが目に入つた。縄文・弥生・古墳時代の土
器、石器や、捕鯨・海士の用具等が展示されて

いた。
志岐には昔、鬼が住んでいたという伝説があ
り、これを退治した「百合若大臣」が、鬼を押
え込んだところを、脳裏に印象強く刻まれている。
掲げてあつた。脳裏に印象強く刻まれている。
郷の浦を去つた車は、岳の辻へと速度をあけ
て突走つたのである。

岳の辻（展望台）

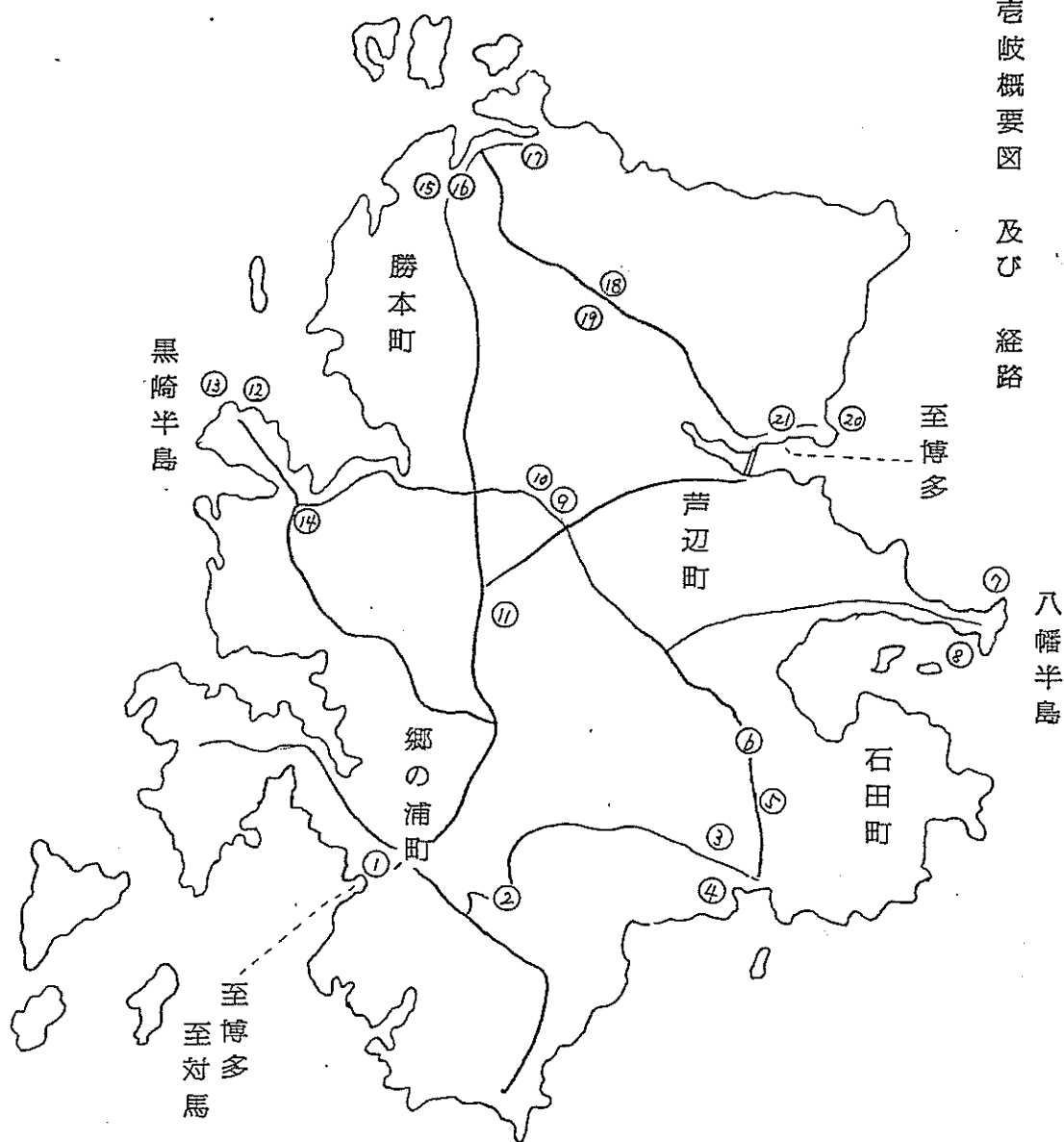
標高二一三米の志岐最高峰であるこの地は、
噴火によつて出来たといわれ、頂上の展望台か
ら全島は勿論のこと、九州本土や対馬も眺望す
ることが出来る。

かつて「白村江」の戦いに破れた日本が、新
羅・唐の来襲をおそれ、天智三年（六六四）に
烽（ノロシ）を設けた所として有名である。又
幕末の黒船来航時には、異国船監視の為の遠見
番所が置かれた処でもある。

「白村江の戦」とは、
六六三年、朝鮮の白村江（錦江）に於ける日
本と新羅・唐の連合軍との戦いである。日本が

救援に赴いた百済は滅亡し、唐が救援した新羅
が勝利を取めて朝鮮半島を統一することになり
、日本は半島から後退したのであつた。
その結果、連合軍の日本進攻は必至と判断し、
志岐・対馬・筑紫等に防人や烽が置かれた訳で
あつた。

壹岐概要図 及び 経路



21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

芦	弘	新	文	天	勝	城	刀	猿	黒	住	鬼	島	は	左	安	原	唐	遠	岳	郷
辺	安	城	永	ヶ	本	山	伊	岩	崎	吉	の	分	ら	京	国	の	人	新	の	の
港	の	神	の	原	港	公	の	砲	砲	神	岩	寺	ほ	鼻	寺	辻	神	羅	辻	港
	役	社	役	イル		園	古	台	跡	社	屋	跡	地		遺	跡	使	墓		
			跡	力			戦					蔵								
				池			場													

遺新羅使の墓（石田町）

岳の辻から印通寺に向う途上の左手の畑の中に、遺新羅使の墓がある。木立に囲まれた小さな墓は、注意して捜さないとうっかりない程の、高さ一米にもみたくない小さなものだ。第四五代聖武天皇の天平八年（七三六）遺新羅使一行の一人であつた「雪連宅満」は、雄途空しく疾病にかかり、十一月八日病死した。そして里人たちの手によつて、石田町と呼ばれる此の地に葬られたと云い伝えられている。万葉集巻一五に歌と共に記載されているが、説明板にも次のように書かれてあつた。

「石田野に宿りするきみ家人の
いづらとわれを問ははいかに言はむ」
当時としては、我々が魂を燃焼させて征途に
いた時の心境にも優るものと思う。
先人の客死を嘆き悲しみ、謹んで供養の心を
捧げたのであつた。

唐人神（石田町）

遺新羅使の墓の近くに「唐人神」がある。
中世のころ、此の地に唐人の下半身の死体が
流れ着き、土地の漁師が丁重にまつたと云うも
の、如何にも奇怪の離島らしいことである。
その後、腰の下の病氣に靈驗があらたかと云う

ことから、夫婦和合、安産、良縁等に神通力
があるとされている。それにしても、男根ま
で供えた小さな叢祠は珍しい存在である。
がこの地方では丑満参りをする人が多く、誰
が云い伝えたのか、

わたしや唐人崎の唐人神よ
わたくしや唐人崎の唐人神よ
といつた歌とも言葉ともつかないものが、語
りつがれていいるそうである。

安国寺（芦辺町）

石田町と芦辺町の広範囲にまたがり、弥生
時代（約二千年前）の墓跡が多く、その代表
的な原の辻遺跡を過ぎると、正面の山際に寺
の山門が見えて来た。安国寺である。山際に寺
歴応元年（一三三八）、足利尊氏が元寇の
乱以降の、多くの戦乱による戦死者の冥福と
天下の安泰を祈願するために、全国六十六
州に建立した寺の一つである。全国六十六
山門と安永九年（一七八〇）ころ再建され
た仏殿には往時を偲ばすものがある。又境内
には通称千年杉と呼ばれる大杉があり、静寂
な空気は自ら我々を敬虔な心にさせたのであ
つた。
本尊地藏菩薩は足利時代の作、釈迦像は鎌
倉時代の作で、国指定重要文化財の高麗版大
若経等も保存する臨濟宗の寺院である。

「左京鼻」 「はらほげ地蔵」

芦辺市街の南に突出した八幡半島の北端が左京鼻と呼ばれる観光名所である。玄界灘に面した雄大な海蝕崖と、海中に白波を砕く岩柱との奇観が、旅人の眼を楽ませてくれた。対馬と地形が異り、断崖の少い壱岐では珍しい所で、今日は観光客もなく、寂しいところに人の来てくれた喜びというか、空谷足音の感じを受けたのであつた。

海女で知られる八幡半島の南岸の海中に、六体の石の地蔵尊が一行に並んで立つている。胸のところに丸い窪みがあることから「はらほげ地蔵」と呼ばれるそうである。そして、なで地蔵にお参りしたことを思い出して、早速素足になつて海水につかり、石の地蔵さんの腹をなでてみた。潮の干満によつて海に浮いたように見えたり、足元を見せたりする地蔵さんは珍異である。いつ誰が何の為に祭つたか明らかでなく、遭難した海女の冥福のため、或は捕獲した鯨の慰霊のため、又疫病退散のためとも伝えられているという。お地蔵さんを離れて大道り出ると、此の附近一帯の各住居は、防風の為に北側を石積みの大きな塀垣で囲い、その上に美事な樹を植えて、大実は大庭園をもつた大豪邸のようである。羨ましい。

構であつた。

島分寺跡（芦辺町）

島の中央部に「あごかけ石」という大柱石がある。石の上部にある窪みにアゴを掛けて休んだらしい。大男の私でさえも其の窪みには背伸びしても届かないから、随分大きな男が住んでいたのであらう。珍しい石である。その近くには小堂の建つた島分寺跡がある。天平十三年（七四一）聖武天皇の詔によつて全国に国分寺がつくられたが、当初壱岐では島分寺と称し、明治になつて現在の国分寺に合併されたのである。説明板には「壱岐は古より一国として取扱われ、この附近が国分寺と伝えられて瓦片が出土している。瓦片には布目や筵目が見られ、奈良朝のものであることを示している。」と書かれてあつた。

鬼の岩屋（芦辺町）

寺跡から西方五百米のところに鬼の岩屋がある。豪族の墳墓と思われる壱岐最大の古墳である。（古墳時代後期の六世紀）
○江戸時代には三三八基が確認され、現在は五基が保存されているという。現在五基の基は奥約一六米、玄室は三米四方、高さ三・五米の石を積んだ横穴式の円墳である。

鬼とは元来「人の帰する所を鬼の岩屋と呼んでいる。鬼のように、本来の鬼は死者の靈魂であつて、われるように、王者の祖靈を神格化したものだ。」と「鬼神」とは「武者の祖靈を神格化したものだ。」と中国の周書には「武王が「能く鬼神に事ふ」と記載されており、「魏志倭人伝」にも「邪馬台国」の女王卑弥呼が「鬼道に事え能く衆を惑す」と書かれておられる。現存の「鬼道」に「鬼は、恐ろしい面だけが強調されて、邪悪な魔性とされたように、本来の鬼神の信仰が曲解されてしまつたようである。」

住吉神社（芦辺町）

この「吉」の住吉神社は、我が国住吉神社の東宮といわれ、長門の一の宮、摂津の住吉神社と共に日本三大住吉の一つである。宮殿は四角の壁がなく、至つて清楚な感じの宮で、遠く神々しさを覚えたのである。神社の御由緒に、
「当社には神功皇后新羅御親征御凱旋の時、三韓鎮護の爲、軍越神事を定めて、御親祭あらせ給位しに始まる。文徳天皇始め十一回に互つて神位を御進めになり、醍醐天皇の御代には式内名神大社に、明治四年五月には国幣中社にそれぞれ御列格云々：：朝野の御尊崇殊に厚き神社なり」として、恭しく拝礼して辞したのであつた。

砲台跡と猿岩（郷の浦町）

吉岐西部に突出した黒崎半島は、周囲は断崖で上は天然の芝生で覆われ、先端には猿の姿にそっくりな奇岩「猿岩」（四四・九米）が紺碧の海を背景にして聳え、左京鼻と並ぶ景勝の地である。猿岩の極く近くに黒崎砲台跡が、国破れて山河ありと云わんばかりに残骸を残していた。往時、往時には対馬の豊砲台と相い峙して海峽を凝視し、玄界は総て射程内であつたから一隻の敵艦の通過も許さなかつた事だろう。二連砲の此の要塞重砲は平常は地下に潜り、海上からは見えないう仕組になつていて、ペトンで固めた台座は昭和の遺物、否古戦場と云るかもしれない。事の善悪は別に、旧軍の歴史は永久に残してほしいと念願しつつ、車は勝本町へと北進したのであつた。

勝本

吉岐北端の地で、近世捕鯨基地とイルカ騒動で有名な勝本は、神功皇后の朝鮮征伐ゆかりの所である。皇太后が渡海のおり、順風がおこつたので「風本」と呼び、凱旋上陸の地となつた事で勝本と改称されたという伝説がある。（勝本には其の為か、神功皇后を祭る聖母神社がある）

土・桃山時代の見渡せる丘の上の城山（公園）は、安
ずかに昔日の面影を止め、勝本の美港が瞰下で
ける展望の地である。
前の名護屋に本拠を置き、豊臣秀吉は唐入り（朝鮮出兵）に際して、肥
府中（清水山城）に出城を築き、釜山への補給
路としたのであつた。
天正一九年（一五九一）九月、秀吉の命を受
けた彦岐の領主杉浦鎮信（平戸城主）はこの城
山（七八・九米）の頂上に城を築き、短時日の
うちに城を完成したことは、歴史的に有名であ
る。（明国では唐入り・朝鮮出兵を万曆朝鮮役
と呼び、朝鮮では壬辰・丁酉の倭乱と称してい
る）
歴史的に名のある町と共に、美景良辰である
勝本を、意に任せて散策することも許されず、
下山して彦岐最後の珍味を美味したいと、運転
手の選んだ寿司屋「どい」で昼食をとることに
なつた。
当時、ニュースとして騒いだ一億円事件の連
中も、この店の常連だつたらしく、芸術写真マ
ニヤの主人は、自慢の力作を展示した二階へと
案内したのである。
「美不言、自成、誤」（美しい写真はものを云
わないが、この力作を見て、自然に後につづく
者があるだろう）と、賞賛の詩を書いて投書箱
に投函しておいたのであつた。

文永の役・新城古戦場（勝本町）
寿司屋の主人からは「天ヶ原イルカ池」を
見て行くようにと奨められ、車はイルカ池に廻
つてくれた。
イルカの回遊で悩まされた勝本港湾の一角に
、多数のイルカを養つて自然の中で遊泳させて
いる光景は、イルカの里に相應しい見事なもの
であつた。
芦辺町との境に新城神社があり、これと指呼
の間、文永の役、新城古戦場。千人塚がある。
対馬の連合軍は、文永十一年（一二七四）十月・
高麗の連合軍は、文永十一年（一二七四）十月・
十四日、烈風が枯葉をはき散らすように湯の本
（勝本町西南部）及び勝本浦に上陸し、守護代
であつた平景隆は、わずかに百余騎を以て湯の本
方面に迎撃したのである。然しながら寡兵と兵
器の劣勢は如何ともし難く、苦戦に陥つて遂に
景隆の居館と伝えられる此の新城の地に敗退し
た。そして翌十五日、最後の戦に挑んで一族
郎党は、共々城内で自刃したといわれている。
かかつて我々が少青年時代から軍隊時代を通じ
て教え込まれた犠牲的精神というが、武士道の
無言の力に刺激されて、恭しく拝礼したのであ
つた。
カマキリが前足をあげるように、力の弱いも
のが自分の実力も知らずに、徒らに強者に刃向
いの没我の精神は、今の世代はどのようにか
いるのだろうか。自衛とは一体何であるのか。

第二次大戦の敗戦以前と敗戦以後とは史観の上で、著しい変化が生じてしまった。敗戦前は精神的な史観又は道徳的史観が幅をきかせ、ゆき過ぎのあつた点は大いに反省すべきだが、唯物史観だけを重視尊重する現世相も、強く且烈しく考えなければならぬと思えてならないのである。

社の前方に千人塚という供養塔があつて、土地の人達は蒙古塚と呼んでいるとの事だつた。濃霧の発達していない其の当時、視界ゼロの、孤獨な指揮官の責任の重圧感を、彷彿として想起させ、去り難い中を辞さなければならなかつた。

弘安の役 瀬戸浦古戦場（芦辺町瀬戸）

、吉岐を一巡して最後の訪れる地となつた。即ち雄々しくも僅か十九才の吉岐の守将、少貳資時が、凄惨な最期を遂げた悲劇の古戦場の跡である。

芦辺の対岸を瀬戸と云い、其の瀬戸浦は二軒にも及ぶ入江となつていて、船舶の碇泊に最適で軍事的に重要な港湾である（現在芦辺港）

弘安四年（一二八一）蒙古東路軍約四万は対馬を侵し、五月二十二日には吉岐を占領して六

月初旬、博多湾に押し寄せたが、大損害を被つて一時的に吉岐に撤退したのであつた。

彼等の作戦は揚子江（長江）の流域の蒙古江南軍と合流して、一挙に大宰府を攻略する策で

あつた。その計画に基いて六月下旬、吉岐の瀬戸浦に後退して来たのである。瀬戸浦が選定された理由は、水軍の基地に最も適した絶好の入江であると共に、九州本土と吉岐を結ぶ最短距離に位置していたからであらう。

大宰府では少貳経費が率先陣頭に立ち、当時博多方面の警護の任についていた隆摩・筑前・肥前の兵を率いて吉岐まで追撃した。そして六月二十九日から七月二日にかけて、壮烈極まる戦斗が繰り返されたのであつた。特に瀬戸の西北の高地には少貳氏の私領であるのと、瀬戸の西北の高地には船匿城を構えていたこととから、この要地の争奪戦は当然熾烈であつたと思われる。

このような状況のもとに少貳資時は、僅か十九才の若輩ながら一軍の将として奮戦力闘し、残念ながら遂に刀折れ矢尽きて、悲哉、敵の刃にたおれ、石をいだいて淵に入るように悉く悲惨な最期を遂げたといふのである。此の興亡に殉じた赤誠に心痛んで声無く、此処でも憂患の続いた干戈の地を彷彿させたのであつた。

寂寥とした古戦場の跡には「贈從四位少貳資時公之墓」としての墓詞が祭られ、我々の弟涙をさそつたのである。墓の東側の咫尺の地に、その霊を祭る吉岐神が装いを新にして建ち、肺腑を震撼させながら當時を偲び、謹んで額いたのであつた。

芦辺港に於て親遇

戦後は価値観も移り変つて多岐にわたり、夷狄に膝を屈せず最期を飾つた少式資時の精神を理解する人も少くなり、次第に風化することをも嘆きながら、車は世を超越した盟鷗の友の待つ芦辺港へと急行した。落月屋梁の想いの馬渡弥五郎・下条岩雄両氏と（瀬戸浦在住）郷友のように、雄勝の弘安の古戦場で再会できたことは、喜岐の紀行に掉尾を飾つたものと感銘したのであつた。軍は破れて会稽の恥を身に泌み、翻雲覆雨の世になつたものの、矢張り我々の歴史は未だ亡びていない証だ。と心喜したのであつた。会釈して交わす言葉も激しい情緒の余り口数も少く、以心伝心、目は口ほどものを言う、と言葉通りで、警効は相互に感じる人のみぞ知ると云うところである。僅かに六時間に過ぎなかつた喜岐滞在に於て、暴虎馮河の戦いに亡くなつた戦友の霊に、直接詣でる機会が得られなかつた点は、慚慚の至りであつて牽強附会と云われても一言もない次第である。乗船客で賑う芦辺港のターミナルは混雑し、数多の人の中では古い交りである我々は、一友と旬酒は古いほど良い、とばかりに情を温め、たが、友睦する時間を瞬時に過ぎ去つた。しかし管鮑の交りを深める事が叶えられて其の御芳情に深謝し、一五・四五出航したのである。

棟鄂之情

棟鄂之情は

棟とは庭の桜の事で兄弟の仲の
良い事をいう。即ち戦友愛。
鄂は花のぼつと開くさま。

於金銭強

金銭於強く

金の価値の比ではなく強い。

永綿夾載

永綿夾載として
永綿は永いこと。

夾は重ねること。
載は歳に同じで永久の意。

不知所終

終る所

終る所を知らず
あの世までも変らず終るもの
はない。

結

友情は、しばしば灌漑を要する植物のように、しばしば逢うことによつて益々深くなる事だと思つて、いるうちに、船は一七・四〇博多港に着いた。流連の楽しみは家に帰ることも忘れてしまひ、大山家の親切な言葉に甘えて入幕の賓となつて、南柯の夢を見させていたかくことになつた。案内を煩わして、流暉に恋着を覚えたのである。人生は根柢なく路上の塵の如しと、身を捨てて命の限りを燃やし、其の間に培われた心の交わりを、今回の旅行ほど肌に感じたことは稀であつた。別「盤根錯節に遇わずんば、何を以てか利器をの節に遇わなければ、鋭い刃物の利鈍は分らないのと同じく、糸のようになく繋かれた命を戦場で共にし、生死を契機した者しか味えない魅力であつたのである。物を以て心を満たすのではなく、心で以て心を満たす臨本を、各地の賢兄から教えられ、是に浩呼して感謝申し上げる次第である。枯野の燃えさかるような、彼の凄惨な戦場を回り、顧した以上に、「墓碑のない墓地」が未だ彼の

地に残されていることを、哭して働いたのであつた。第二の故郷とも思ふ北九州各地に對する并州の情は計り難く、久し振りに煩わしい処世の心労を忘れて、此の紀行の結とする。

昭和五十九年五月

寺前信次